

【研究ノート】

太平洋戦争直前における松下電器の「鍊成」運動会とその周辺 —下村宏との関係と「鍊成」概念の横滑り

坂本慎一

序

松下電器（現パナソニック）は太平洋戦争において、軍の要請によつて木造船や飛行機の製造を行なつた。どのようにして戦争協力を行なうようになつていったのか、その過程は注目すべきであるが、本稿

では、その前段階である開戦直前の松下電器に注目したい。特に松下電器が行なつていた社内運動会は、体育史の觀点を通じて当時における松下電器の精神性を見る上でも有効である。

松下電器は、戦前から社内福利に熱心な企業であり、社内の親睦団体である歩一會によつて、運動会も定期的に開催されていた。日中戦争下の運動会について、松下幸之助は次のように述べている。

事変後は名称を体育大会と改め、その内容も鍊成を主としたものとし、甲子園原頭において行なうにいたつた。昭和十六年の第五回体育大会のごときはその統制ぶりに、その間髪を入れない進行ぶりに、八万観衆を恍惚たらしめ、強い感銘を与えたことはまだ記憶

の新たなるところである。⁽¹⁾

昭和一六（一九四二）年、太平洋戦争開戦直前の運動会について、幸之助は「鍊成」を主とし、非常に隆盛を誇つたと証言している。ここでは開戦直前という微妙な時期と、「鍊成」という単語に注目しておきたい。

本稿では、昭和一六（一九四二）年の「鍊成」運動会がどのような状況において開催されたのかを論じる。通常は、軍国主義が強化されてゆく当時の状況において、「鍊成」なるものは精神主義的で軍国主義に沿うものと解釈されがちである。太平洋戦争が激化すると、日本中で精神主義が強化され、はなはだしい場合には、訓練や指導と称して理不尽な鉄拳制裁や虐待が軍を中心に行なわれたことは、周知の事実である。⁽²⁾ 本稿の第三章第一節で論じるように、松下電器でも昭和一九（一九四四）年になると一定の精神主義的な指導が行なわれ、それと並行するように松下電器は軍部に協力するようになつた。昭和一六（一九四二）年の「鍊成」運動会も、その序章のように解釈できる。

しかし、以下の論考で明らかになるように、昭和一六（一九四一）年の「錬成」運動会は、國家が軍国主義、精神主義へ傾いてゆくなっただで、その動きに逆行する面が含まれていた。松下電器にとって、「錬成」運動会は、軍国主義に対する最後の抵抗であつた。

本稿で特に重視したいのは、当時大日本体育協会会長であった下村宏との関係である。幸之助は下村の行なつていた事業にさまざまな形で協力しており、個人的にも交流が深かつた。松下電器における体育も、おおよそ大日本体育協会の平和主義的な方針と並行していた。

I 昭和一六年の「錬成」ブーム

1 松下電器における運動会の詳細

—『松下電器社内新聞』の記事より—⁽³⁾

松下電器には大正九（一九二〇）年から、社内の親睦をはかる機関として歩一會が組織されていた。昭和六（一九三一）年四月には、歩一會による第一回運動会が天王寺公園のグラウンドで開催される。これとは別に「歩一會尚武団」（三号五面）や、「武道大会」（一八号三面）、歩一會保険部主催の「支部対抗野球大会」（八号四面）など競技別の団体や大会もあり、他社との交流もかねた「大阪ラヂオ連盟野球大会」（二〇号五面）、「工場体育連合大会」（三八号三面）、東京においても昭和九年度から岡田電機商会と合同で「連合大運動会」（六号三面）などが開催されていた。

「運動会」に関しては、春季と秋季があつたが、秋季の「運動会」は今日でいう運動会とは趣を異にし、たとえば昭和一〇（一九三五）年一〇月六日の「歩一會秋季運動会」は、歩一會娯楽部の主催で、支部ごとに鳴門觀潮、奈良・笠置周遊、宇治川ライン周遊、琵琶湖周遊などを行なっている（一〇号一面）。昭和一一（一九三六）年の「秋季大運動会」も行き先が異なるだけで、ほぼ同様の内容であった（二五号三面）。当時は松下電器に限らず、こうした遠足や遊覧も「運動」の一部として考えられていたため、「運動会」と呼ばれていたようである。

これに対して春季の運動会は今日考えられる運動会とほぼ同じであった。たとえば昭和一一（一九三六）年の第六回春季運動会の準備について、次のような記事がある。

歩一會年中行事の中最大で而も対外的にも松下電器の眞の姿を表徴する我春季大運動会も早目睫の間に迫つて來た。本年は全參加員数三千を算し、過去五回の運動会の経験を活用して更に一步を進められた統制ある団体的・精神を發揮しやうと、会長を初めとし各競技委員、幹部の諸役員は連日連夜会合して種々の準備に忙殺されてゐる。一方会員の方では、男子スエーデンリレー、女子リレーを初めとし、廿七種目の競技に各支部切つての優秀選手をグラウンドに送り出し、他方応援団の練習も物凄く、昼休み、終業後の余暇を利用して、或は拍手、或は踊り等、鳴り物入りで運動部の前奏曲は愈々白熱化して來た。（一五号三面）

この運動会は、同年四月一九日、天王寺公園グラウンドで開催され、三千名の社員と一万人の観衆を集め成功裏に終わった。松下幸之助は「これは単なる松下人の慰安のみでなく、一種の社会奉仕であると云ふ自信が附きました」（一六号一面）と述べ、この運動会は「確定した年中行事の第一回」であったとしている。

昭和一二（一九三七）年の第七回春季大運動会は同じく天王寺公園で四月一日に行なわれ、入場式や来賓の挨拶のち、午前一〇時から二百メートル走、スプリンターレー、一人一脚、支部対抗リレーなどの競技と、仮装大行列が行なわれた。午後四時半より閉会式が行なわれ、優秀者の表彰などがあつた（三三号三面）。

日中戦争開始に伴い、昭和一三（一九三八）年四月に国民精神総動員法が公布されると、松下電器も対応を迫られた。四月二九日に「国民精神総動員松下電器実行会」が発足し（四五号一面）、今後の会社運営のあり方が協議され、昭和一三年の運動会は中止された。昭和一四（一九三九）年一月の入社式も「国策型入社式」となり、詳細は不明であるが、実習の名の下にすぐに実務に就かせたと記事は記している（五三号一面）。幸之助は「我々産業人としても此際一層時局を認識し、聖戦の目的の貫徹に協力致さなければなりません」と述べた。

昭和一四（一九三九）年の春季運動会は事実上第八回の運動会であつたが、「産業報国歩一回体育大会」とされ、四月九日、場所を甲子園南運動場に移して開催された。記事は次のように紹介している。

今年は例年と趣きを異にし、先づ皇軍感謝武運長久祈願祭を執行の後、従来の娯楽本位の運動会を取り止め、体位向上本位、又団体的訓練を主とする団体体操を多数採り入れ、消費節約の線に沿つて質素に行つた。：開会式、二百米競争と順次競技進行し、殊に団体体操では、男子の建国体操、女子の民謡体操の何れもその統制ある美事な演技に松下伝統の精神を遺憾なく發揮し、観覧者は皆その秩序整然たる調和美に恍惚とし、暫く時の経つのも忘れ、ただ感嘆の声を放つばかりであつた。（五六号一面）

記事は「顧みて本体育大会は時局にふさはしく實に意義深いものがあつた」としている。東京においても四月一三日芝公園で「第一回体育大会」が開催された。

歩一回はこれに遅れて七月六、七日に「産業報国歩一回」としての結成式を三郷と門真で挙行した（五九号一面）。また各工場では、従来のラジオ体操に代わって「大日本国民体操」を奨励し、次回の運動会に向けた訓練が行なわれた（六五号三面）。

昭和一五（一九四〇）年五月五日、第九回創業記念式が甲子園球場で行なわれ、引き続き「紀元二千六百年奉祝第二回体育大会」が開催された（六七号三面）。主催者側発表で五万の観衆を集め、少将クラスの軍人數人が来賓として招かれた。この時は、徒競走などの競技は特に記事に記されておらず、行進と団体体操だけが紹介されている。最後に五百名の男子によつて「大模擬戦」が行なわれ、実際に爆弾を炸裂させ、記事は「大陸戦線を彷彿せしめて感銘一入深かつた」と締め

くくつている。

翌昭和一六（一九四二）年五月一八日、甲子園球場で開催された運動会は「第十回歩一會体育大会」となっている（七五号一面）。これを「第十回」としたのは、「産業報国歩一會第一回体育大会」を実質上の第八回、「紀元二千六百年奉祝第二回体育大会」を第九回と数えたものと思われる。

内容は、男子四千名による大日本国民体操、女子七百名による吟詠体操などマスゲームが中心であったが、支部対抗リレーも行なわれたと記事には明記されており、昭和一五（一九四〇）年に比べると元の運動会にやや戻っていたようである。観衆は、主催者側発表で六万人とされ、前年に行なわれた模擬戦は記事には見えない。

昭和二〇（一九四五）年八月一五日からマッカーサーが来日する三〇日までの間、日本は官民をあげて証拠書類を焼却しており、松下電器も戦争協力をしたため、関連書類を焼却したようである。^④ 太平洋戦争中に運動会が開催されたのかどうか、今後の調査が必要である。

2 従来の体育史研究

松下電器において「鍊成」運動会が催された昭和一六（一九四一）年は、従来の体育史研究において、どのような時代であると認識されていたのであろうか。

川島虎雄『日本体育史研究』（黎明書房、一九八一年）は「昭和一二年ころには、日本の教育はファシズムに向かつて、はつきりと体制をかためていく」と指摘しており、「昭和一二年七月日華事変勃発によ

り、わが国の体育界も、自由主義的なものは清算され、戦時体制へとかわっていく」と解釈する。詳しい分析はされていないが、昭和一二（一九三七）年以降は「戦時体制」であったとしている。

入江克己『日本ファシズム下の体育思想』（不昧堂出版、一九八六年）は、この時期の体育を、大正中期から満州事変（第一段階）、満州事変から日中戦争の開始（第二段階）、日中戦争から太平洋戦争まで（第三段階）、太平洋戦争の開始から敗戦まで（第四段階）の四段階で解釈している。松下電器の「鍊成」運動会は第三段階に該当するが、これを「ファシズム体育思想の確立期」としている。

これに対し、今村嘉雄『日本体育史』（金子書房、一九五一年）は、この時代の体育を考える上で、昭和一二（一九三七）年一二月、国民精神総動員中央連盟が結成され、「国民精神総動員に際し体育運動の実施に関する件」が通牒された事實を重視している。^⑤ また昭和一三（一九三八）年八月「体育運動実施に関する件」もあげ、これらの政策について、第一に鍛錬主義、鍊成主義、第二に、情緒的、美的表現の抑圧、創作と鑑賞の余地がなくなつたこと、第三に、団体訓練、団体体操の強調といった特徴があつたと指摘している。今村は昭和一八（一九四三）年三月の「戦時学徒体育訓練実施要綱」、六月の「学徒戦時動員体制確立要綱」をもつて、戦時体制の“完成”だとしている。^⑥

一方で今村は、こうした政策は「国民体位の低下に対する反省から出発し」「徵兵検査における合格率の低下に対する軍部の指摘に端を発した」ものであり、厚生省主導の体力章検定は、欧米では「職場生活への身体的適性を訓練する目的でとりあげられた」もので、日本で

は大正時代から行なわれたが、全国規模になつたのは「昭和十四年八月一日の厚生文部次官通牒公示以後」⁽¹²⁾としている。また、「国民の体力に関する反省と関心は、単に軍部に止まらず政府ならびに関係学術諸団体のひとしく関心するところであつた」としており、関係団体として日本学術振興会、日本医師会などをあげている。⁽¹³⁾これに関連する政府の動きとして、「国民体力法」（昭和一五〔一九四〇〕年四月八日公布、九月二十五日施行令、二六日に施行規則公示）をあげ、「国民体力鍛成目標実施要綱」が昭和一九（一九四四）年大日本体育会から発表されたと述べる。⁽¹⁴⁾

また、「学徒体育振興会」が昭和一六（一九四二）年一二月一五日文部大臣を会長として発足した事実をあげ、全国的な大会は昭和一七（一九四二）年度が最後、地域大会も一八（一九四三）年九月が最後であつたと指摘している。⁽¹⁵⁾さらに昭和一四（一九三九）年一二月厚生・文部大臣の諮問機関として「武徳振興委員会」が発足したとし、昭和一七（一九四二）年三月二一日には「大日本武徳会」が発足（明治二八〔一八九五〕年発足の「大日本武徳会」と同じ名称でも別団体）、銃剣術や白兵戦重視の訓練が行なわれたとしている。⁽¹⁶⁾

今村は、昭和一六（一九四二）年当時の体育界の状況について、必ずしも軍部の指導だけではなく、文部省や厚生省などさまざまな団体がそれぞれの思惑で体育を振興していたと解釈している。

水野忠文他「体育史概説」（体育の科学社、一九六六年）も、今村とやや似ている。国民精神作興体育大会などを「体協など民間団体主催の競技会も軍事的色彩が濃く」なつたとする一方で、「この時期を無

条件に“スポーツ受難の時代”とはいいけれない」と明言しており、日中戦争下における体育に一定の評価を下している。水野は「最後は、大日本体育会の設立（昭和一七〔一九四二〕年四月）で、大日本体育協会とその傘下競技団体を解散して競技界の一元化による翼賛体制確立を目指し、総理大臣を会長に学徒体育振興会もその一部に加えて競技よりも国民体力の鍛成をはかる組織となつた」と述べている。⁽¹⁸⁾水野は、戦前における日本体育の終焉を昭和一七（一九四二）年の大日本体育会の成立に見ており、太平洋戦争開戦の直前であった昭和一六（一九四二）年は、まだ体育が健全でありえた可能性を匂わせている。

日中戦争以降を「スポーツ受難の時代」とすると、昭和一六（一九四二）年の松下電器の「鍛成」運動会は、局所的で特異なものとされる。しかし、実際には日中戦争開始以降にも、体育関係者の懸命の努力が続けられていたのである。

3 「鍛成」ブーム

日中戦争下、太平洋戦争開戦直前の日本は、運動会が非常に盛んであった。全国規模の詳細は今後の研究を待たなければならないが、この時期は大日本体育協会によつて数々の大運動会が開催された時期である。

下村宏は第四代大日本体育協会会長に就任すると（後述）、昭和三（一九三八）年一月「国民精神作興体育大会」を開催した。三日から六日まで神宮外苑競技場を中心に、二〇日から二三日まで甲子園を中心につづいて数々の大運動会が開催された。

年に新京や奉天などで「日満華文驛競技大会」、東京市新宿にあった陸軍戸山学校で「傷兵慰問体育運動大会」、昭和一五（一九四〇）年には東京と大阪などで「紀元二千六百年奉祝東亜競技大会」、昭和一六（一九四一）年に陸軍戸山学校で「陸軍病院慰問競技大会」などが開催されている⁽¹⁹⁾。それぞれ新聞やラジオで取りあげられたこともあるて、大きな反響を呼んだ。また、大日本体育協会はベルリンオリンピックの記録映画『民族の祭典』の日本語版を作成し、各地で上映会を開催した⁽²⁰⁾。下村については後述するが、必ずしも軍部に対して全面的に屈したわけではなく、ましてこれらは直接軍部に命令されて行なつたことではない。大日本体育協会は、軍部からさまざまな干渉を受けつつも、この時点ではまだ独立性を保っていた。

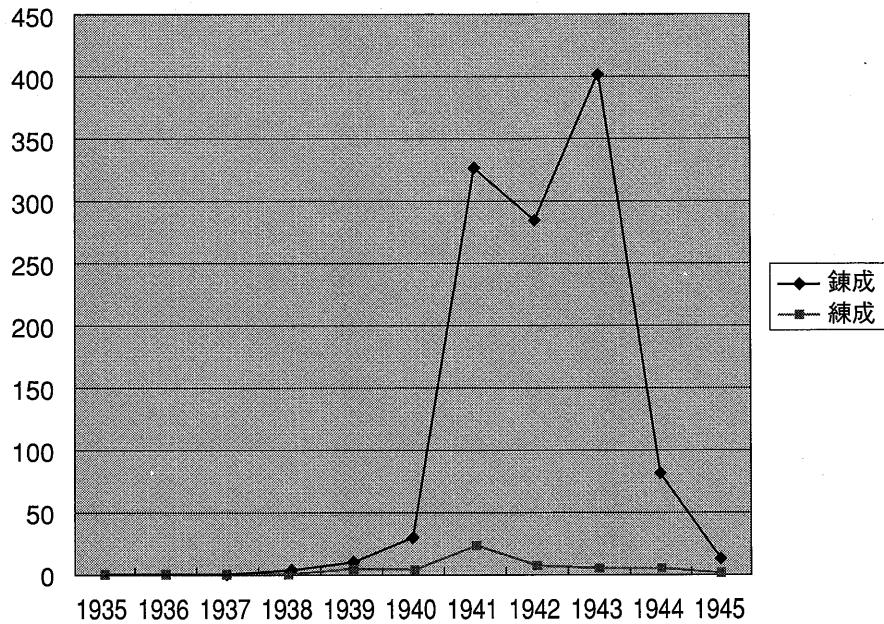
一方、昭和一三（一九三八）年に厚生省が設立され、九月六日、体力章検定を制定すると決定した。これはアメリカ、ドイツ、ソビエトにならって日本でも国民体力の増強を国策として行なおうとしたものである。翌年三月二九日に決まつた標準は次の通りである。

百メートル走	初級一五秒	中級一四秒	上級一三秒五
二千メートル走	初級九分	中級八分	上級七分三〇秒
走り幅跳び	初級四メートル	中級四メートル五〇	上級四メートル八〇
手榴弾投げ	初級三五メートル	中級四〇メートル	上級四五メートル
五〇メートル土嚢運搬	初級四〇キロ一五秒	中級五〇キロ一	

三秒 上級六〇キロ一五秒
懸垂 初級六回 中級一〇回 上級一五回⁽²¹⁾

対象は一五～二五歳までの男子であり、初級は徵兵の甲種合格の水準であり、上級合格は相当に困難であった。検定合格者にはバッジが与えられ、就職や結婚において有利になるとされた。厚生省と下村の関係は後述するが、大日本体育協会の啓蒙と厚生省の政策が相まって、全国各地で体力章検定合格を目指して手榴弾投げや土嚢運搬を訓練する「鍊成会」なるものが大小さまざまに開催された。

「鍊成」の語について当初の『東京朝日新聞』における見出しを拾つてみると「『行』の効果 蹴球役員鍊成合宿』（昭和一四〔一九三九〕年一〇月二七日八面）、「鍊成の暦を繙く 華は神宮大会と日独伊庭球戦」（昭和一五〔一九四〇〕年一〇月一日六面）、「学徒鍊成部を設け、道場で叩直す」（昭和一五〔一九四〇〕年一〇月九日七面）など、スポーツに関する記述が目立つている。一方で、「大国民の資質鍊成 学務課長会議 荒木文相、初訓示』（昭和一三〔一九三八〕年六月一日一面）、「小学校長鍊成講座』（昭和一四〔一九三九〕年九月一九日一〇面）、「教授連にも鍊成講習会』（昭和一五〔一九四〇〕年一〇月二二日七面）など、精神的指導を強調する内容も散見される。『東京朝日新聞』の記事を見る限り、「鍊成」とは陸軍大臣であった林銃十郎が昭和一〇（一九三五）年の七月に言い出し（七月二六日二面）、昭和一三（一九三八）年五月から文部大臣を務めた荒木貞夫が広め、やがて体力章検定に合格するための訓練として定着したものと判断できる。内容は、どちら



グラフ1：『東京朝日新聞』の記事における「鍊成」と「練成」の登場回数
（『東京朝日新聞戦前紙面データベース』より作成）

かと言えば当初は肉体的訓練が主であったが、精神的指導も多分に混合するあいまいなものであった。

『東京朝日新聞』における「鍊成」の語の記載回数は、グラフ1の通りであり、「鍊成」は太平洋戦争の直前、昭和一六（一九四一）年に急に広まり、戦局の悪化と共に急に使われなくなった単語であった。また、昭和一六年当時、金偏の「鍊成」（三二八回）と共に糸偏の「練成」（二五回）という記述もあり、当初は約七%が「練成」と記述されていたことが分かる。

「レンセイ」とは第一にあいまいさを含む概念であり、第二に当初は漢字の記述も不統一で、第三に急に広められて急に使われなくなつた言葉である。これらは、当時最新のメディアであつたラジオによつて、話し言葉として広められた単語の特徴と一致する。ラジオ以外の演壇や口コミではこれだけの速さで広まつたり忘れられたりすることはありえず、新聞などの紙メディア主導で広められたのであれば、漢字の書き方や内容はもっと明確だつたはずである。この不明確さは、後述のように下村の失脚によつて概念の横滑りの原因となつた。

II 大日本体育協会と松下幸之助

1 下村会長と幸之助との関係

松下幸之助と体育の関係を考える上で欠かせない人物に下村宏がある。下村は通信省の官僚時代に郵便局の簡易保険の創設を行ない、後

に簡易保険局が国民保険体操（ラジオ体操）を創始すると、運動と国民の健康の関係に強い関心を持つた。大正四（一九一五）年に台湾総督府民政長官に抜擢されると台湾体育協会を創始した。大正一〇（一九二一）年に退官して朝日新聞の経営者になると、昭和九（一九三四）年に幸之助と出会い、その理念と人物を高く評価した。⁽²²⁾

明治四四（一九一二）年七月に創設された大日本体育協会は、オリンピック参加において日本の窓口となる組織であり、昭和一（一九二七）年に財団法人となつた。下村は大正一二（一九二三）年に常務理事を務めており、昭和二年には一〇〇〇円を寄付している。⁽²³⁾ 大日本体育協会は初代会長を嘉納治五郎、大正一〇（一九二一）年から岸清一が第二代会長を務めたが、昭和八（一九三三）年に岸が逝去すると満三年もの間会長は空席となり、昭和一一（一九三六）年に大島又彦が第三代会長になつたものの、翌年には辞任した。専務理事の郷隆や嘉納治五郎の強い要請により、昭和一二（一九三七）年一一月、下村が第四代会長に就任した。⁽²⁴⁾ 会長就任のいきさつは専務理事であった郷隆の思い出として、次のように述べている。

郷隆君とは古くより大日本体育協会などにて屢々を合はした事もあるが、直接に個別に交渉のあつたのは、君が僕を体協の会長にと勧誘せるを以てはじめとする。

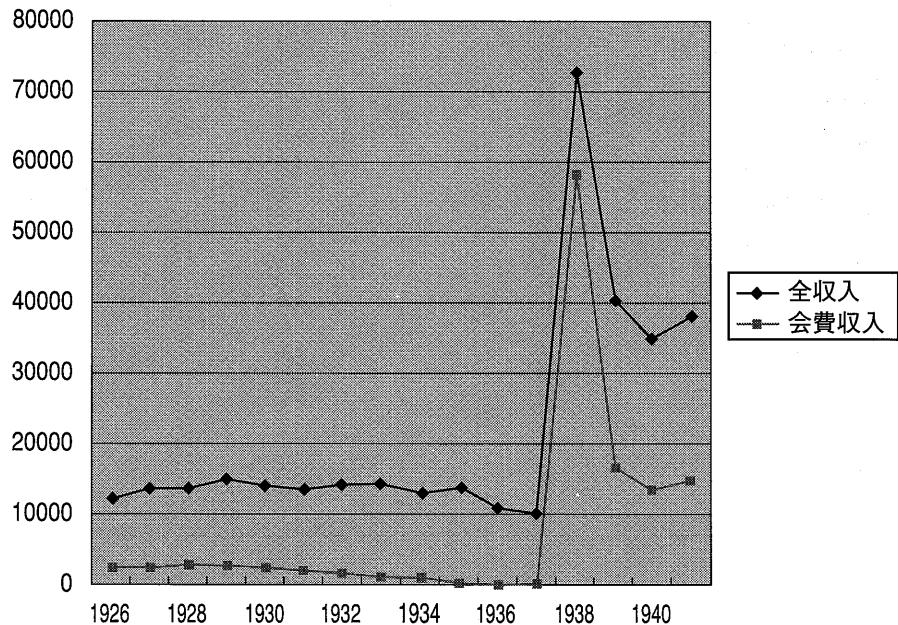
日本クラブや中央亭などで数回口説かれた。いつもオリムピックの事務総長をお断りしたのと同じ理由で折角であるが、その任にあらずと御断りをしたのであつたが、その後嘉納前会長等各位の包囲

攻めと君の根気強い猛攻撃により、三月ほどの籠城も遂にかなはず、とうとう会長をお受けする事となつた。

その後、元の満鉄ビルの楼上なるオリムピック東京大会事務所における郷君との交渉は急激に深く親しくなり、体協とオリムピックを通じ、君と僕とは切つても切れない仲となつた。⁽²⁵⁾

下村は会長就任に際し、大日本体育協会の財務基盤を建て直すことを宣言し、会員を「贊助会員」（年一口一〇〇円か一時金一〇〇〇円を納める者）、「維持会員」（年一口一二円以上納める者）、「名譽会員」に分け、広く大日本体育協会の維持を呼びかけた。⁽²⁶⁾ これにより、一〇二名の贊助会員と五〇四名の維持会員を得て、それまで年一万円程度だった大日本体育協会の収入も四万円近くで推移するようになり、財政は大きく改善されたのであつた（グラフ2）。⁽²⁷⁾

幸之助は下村による呼びかけに応じ、贊助会員になつてゐる。大日本体育協会の贊助会員になれば「オリムピック大会其他、本会の主催する競技会、其他体育関係の会合に付き御便宜を計る」とされていた。昭和一五（一九四〇）年に開催される予定であつた東京オリムピックにおいても、両者の交流があつた。下村は大日本体育協会会長に就任したことによつてオリムピック組織委員会の副会長に就任した。会長就任の挨拶でも「此處でオリムピックを返上すると云ふ事は絶対に出来ない事だ」と述べており、オリムピック開催に向けて準備を進めていた。一方幸之助もまた、「松下のほうも何か技術の分野で参加というか協力したい——と考え、テレビ放送の実施を計画しました」



グラフ2：大日本体育協会の財務状況（単位：円）

（大日本体育協会編『大日本体育協会史』上巻652～6頁、補遺上112～5頁より作成）

と後に回想しており、下村が進める事業に「協力」しようと準備していたことを明言している。⁽²⁹⁾

両者の私的な交流に関して言えば、この時大阪では栗本勇之助を中心とした和歌山県人会である木友会が組織されており、幸之助は昭和一二（一九三七）年以降、木友会の会員であった。⁽³⁰⁾ 下村はこの時東京在住で東京の和歌山県人会の中心であったが、昭和一三（一九三八）年一一月二日、大阪の木友会に出席したと述べている。⁽³¹⁾

さらに大日本体育協会会長時代の下村と幸之助の個人的な交流を示すものとして、昭和一五（一九四〇）年に行なわれた松下正治の結婚式が挙げられる。『松下電器社内新聞』第六七号三面は、松下家が平田家より正治を婿養子として迎え、東京と大阪で披露宴を開いた旨を紹介している。大阪では新大阪ホテル三階祭場で四月二二日午後二時から神式での結婚式が行なわれ、五時半から披露宴が行なわれた。媒酌は住友総務理事の小倉正恒であり、栗本勇之助や村山長舉など多くの政財界人が出席したという。同月二八日、丸の内東京会館でも披露宴が行なわれた。

しかし、幸之助は「結婚式もハタと困りました。松下側のお客さんが少ないと格好がつきません」と回顧しており、特に人脈の薄かった東京の披露宴には人が集まる見通しがたたなかつたとしている。結果的には「野村吉三郎海軍大将、荒木貞夫陸軍大将らが列席」したとしているが、なぜ東京の披露宴に人が集まつたのか、詳細を知らなかつたようである。

『松下電器社内新聞』が東京の披露宴に出席した「名士」として明

記している人物は次の通りである。

湯浅倉平（内大臣）◎

有馬良橘（和歌山県出身・海軍大将・元体協顧問）◎

野村吉三郎（和歌山県出身・海軍大将・元体協顧問）◎

荒木貞夫（本籍和歌山県・元文部大臣・陸軍大将）◎

徳川頼貞（元紀州藩主徳川頼倫の長男）◎

前田利為（侯爵・陸軍軍人・貴族院議員）◎

豊田副武（海軍航空本部長・中将）

谷村豊太郎（海軍中将）

山本（陸軍中将・不詳）

土岐銀次郎（和歌山県出身・埼玉県知事）◎

前田米蔵（和歌山県出身・元鉄道大臣）◎

下村宏

津守豊次（東芝副社長）

岡田悌藏（岡田乾電池）

下村も出席しているので、これだけでも両者に交流があったことは明白であるが、このうち◎を記した人物は、下村の友人や下村が主催する和歌山県人会の会員であり、「名士」の半分以上を占めている。⁽³⁶⁾ 下村は年末の挨拶状を一万通も書くほど広い人脈の持ち主であり、ラジオ演説の名手として著名であつた。大日本体育協会自身が多くの軍関係者を顧問にするなど軍とさまざまつながりを持つていた組織だ

つたので、豊田副武、谷村豊太郎も下村との関係が想像できる。

もともと下村は、結婚式の世話をすることが非常に好きであった。

昭和七（一九三二）年の時点で「僕は媒酌をつとむる事三十有余回、来賓総代として挨拶を述べし事數を知らず」と述べており、台湾に赴任したのは大正四（一九一五）年であつたが、部下の石井光次郎は「下村さんは、もともと世話好きで、台湾に入る前に、既に五十組ぐらいの媒酌をつとめた」と述べている。⁽³⁷⁾

貴族院議員であり、大日本体育協会会長であつた下村ならば、この程度の「名士」を集めることは十分に可能であり、結婚式の世話が好きで幸之助を高く評価していた下村が一肌脱いだのではないか。いずれにせよこの時期、両者は公私共に親密な関係にあつたことは間違いない。

2 下村会長の狙い

下村は遞信省の官僚時代、明治三四（一九〇二）年春に北京へ赴任し、重病に冒されて危うく命を落としかねない経験をした。⁽³⁸⁾ 当時の北京は義和團の乱で荒廃しきつており、衛生状態も劣悪だった。列強八カ国に敗れた惨状を見て、下村は「戦はめつたにやるものでない、敗けたときはやり切れぬ」と書き残している。

昭和一一（一九三六）年、二・二六事件が起きると庄田弘毅が首相に任命され、下村に入閣を打診した。しかし軍部は下村を自由主義者と判断して入閣に反対し、下村は浪人となつた。⁽⁴¹⁾

大日本体育協会会长になつてからも、「日満華交驩競技大会」につ

いて、次のように述べている。⁽⁴⁵⁾

支那事変は現にまだ鎮火してゐない。満州の一角ノモンハンにも兵塵は上つてた。北支一帯は又近時稀に見る大水害である。さうした中に三国青年の交戦競技大会が開かれたのである。それもスポーツなればこそである。スポーツならずして、かかる折も折に、かくまで朗かに何んのわだかまりも無くインテリ青年を結びつけらるものが他にあらうか?⁽⁴⁶⁾

また、朝鮮半島のスポーツ界に向けて次のようにも言つてゐる。

大東亜の大理想はつまるところ相互の親善に外ならない。茲にスポーツを通ずる事が平和促進の捷径である。そこにも競技の意義がある。⁽⁴⁷⁾

太平洋戦争について、「日米間の戦争——これほど無意味な馬鹿氣たものは無い。あの広い遠い太平洋を越えてアメリカへ攻めてゆく、そんな事は日本として考へられてゐるはずが無い」と主張し、統いてアメリカを批判するような論を展開するが、日本語で書き、日本で刊行した本であるから、日本海軍の主戦論者を遠回しに牽制したと解釈できる。

また、アメリカ主導による経済制裁を踏まえた上で、昭和一六（一九四一）年七月、貴族院議員有志による千島列島視察にも下村は参加

している。⁽⁴⁸⁾ 当時日本領であった千島で資源を発掘し、開戦を回避できないか模索したのであつた。しかし、七月二九日に樺太のエストリで狭心症に倒れ、開戦回避の最終段階では病床で状況を見守ることを余儀なくされたのであつた。

太平洋戦争開戦の後、大日本体育協会会長として公表した「大詔を拝し奉り体育人は告ぐ」には、苦しい立場ながら瀬戸際で体育の主体性を守ろうとした意図がよく表れている。

抑も国民体育の目的の第一は国民体力を鍛成して如何なる苦難をも克服し得べき資質を一般国民に与へ以て国防の源泉を涵養するに在ること勿論なりと雖も、特に競技運動には競技の実践を通して敢闘精神を養成するの効極めて顯著なものあるを以て競技運動指導の任ある各位に於かれては特に此点に意を用ひ、愈々競技運動の普及と健全なる実施とに努力せられんことを希望す。尚長期に亘りて国民の士気を昂揚せしめ明朗潤達の気風を国民生活上に横溢せしむる必要を考ふるとき競技運動に特有なる健全娛樂としての厚生的効果も亦此際特に之を重視せざるを得ず、広く体育の目的と効果とを考へて指導上偏狭の弊に陥らざる様特に留意あらんことを希望す。⁽⁴⁹⁾

下村は国民体力の「鍛成」と「敢闘精神」の養成を重視すると述べつつも、「明朗潤達の氣風」を尊重し、「健全娛樂としての厚生的効果」については「特に之を重視せざるを得ず」としている。開戦に及んで「指導上偏狭の弊に陥らざる様」に懸念しており、体育が肉弾戦の訓

練になるような事態や体育と称して鉄拳制裁が日常化するような状況を避けたかつたことが理解できる。

また軍事論についても、下村は大正時代には「肉弾主義は過去」と述べ、「科学の力、頭脳の力」が戦争の重要な要素になつたとし、次のように主張していた。

科学といふ事に深き考慮が拂はれねばならぬ。假令人間を消耗品にしても、多少共効果のある間はまだ可なり。モウ勇氣計りでは通用をせぬ。⁽⁴⁸⁾

昭和一三（一九三八）年以降の大日本体育協会による体育指導もまた、下村のこうした戦争観から考えれば、体育の普及は「銃後」における生産性の増強が念頭にあつても、肉弾戦などの非合理的な戦闘の訓練は考えていいなかつたはずである。従来の体育史研究では、体育が戦時色を強めてゆく過程がほぼ直線的なものとして理解されることもあつたが、下村がこの流れと正反対の思想の持ち主であつたことは強調されるべきである。

また、この時期、厚生省の外郭団体である財團法人協調会が発行していた『産業福利』には、社内福利に熱心な企業が紹介されており、昭和一五（一九四〇）一月には松下電器に関する詳しい記事がある。⁽⁴⁹⁾昭和一六（一九四一）年の「鍊成」運動会は、厚生省との関係が強化されたことも背景の一つとして考えることができる。

この厚生省は昭和一三（一九三八）年に設立されたが、厚生省の設

立は、下村の長年の持論でもあつた。下村は朝日新聞時代から全国健康児表彰の事業を行なつてお⁽⁵⁰⁾り、昭和七（一九三二）年には「上下水道の施設、救療機関及び予防設備の充実等、社会衛生的施設の普及発達」を提唱している。厚生省設立直前には「来春には社会保健省の設立を見る」と述べており、貴族院議員として厚生省設立の内部事情も知つていた。厚生問題は、当時の言葉で言う「人種改良」の一部であり、下村はこの問題に関する日本有数の論客でもあつた。

大日本体育協会の賛助会員になり、下村と公私共に交流のあつた幸之助は、こうした下村の方針を大筋においては共有していたはずである。「精勤運動」により昭和一三（一九三八）年には一度中止された松下電器の運動会が翌年には戦時色を強めながらも復活し、それが昭和一六（一九四二）年になると元の運動会に戻つた形となつた。松下電器もまた軍国主義が強化される時勢を考慮しながら、もともと行なつていた運動会を守るために「鍊成」運動会を催したと考えられる。

III 戰争への横滑り現象

1 その後の大日本体育協会と「鍊成」概念の横滑り

下村宏は太平洋戦争開始の直前において狭心症で倒れたため、大日本体育協会はしばらく放置されていた。昭和一七（一九四二）年四月八日、東京丸の内大東亜会館にて、大日本体育協会は発展的に解消し、大日本体育会へ「強化改組」される発足式が開催されたこととなつた。

大日本体育会は、東條英機が会長、小泉親彦・厚生大臣、橋田邦彦・文部大臣、後藤丈夫が副会長を務め、下村は名誉副会長に祭り上げられた。

発足式において、下村は次のように言つてゐる。

此の時に当り、体位の作興により国民を鍛成すべく政府は新に厚生省を設立し、文部省の体育機構を拡充せらるるあり、民間に於ける各種の体育団体にあつても又之に応じ体育振興の為め刷新強化の声をあぐるに至りました。……

思ふに本会の設立と共に今後老幼男女の別をとはず、都鄙にあまねく本土及び外地に通じ全国民をあげ規制ある指導の下に時局の一線に沿へる体育の強化鍛成を見るに至るべくさらに満蒙、中華民国はもとより大東亜の諸民族より広く全世界にわたり体育を通じて相互の理解を深め親善を増すべく大いに貢献するところあるべき事を確信いたします。⁽³²⁾

大日本体育会への改組を表面上は喜ぶべきことと述べつゝも、これは中華民国などと「相互の理解を深め親善を増す」ものとし、依然として平和へのこだわりを見せてゐる。また、ここで下村が述べる「鍛成」はあくまで体力の「鍛成」であり、体育上の概念であつた。大日本体育会への改組に際し、厚生省は次のように述べてゐる。

今日の体育の指導理念は、皇国民としての自覚に基盤をもつ。第

一線の御奉公に、銃後の御奉公に、所と形こそ異なれ、全国民は尽忠の誠を心残りなく行動に実現し得る強靱激刺たる体力を具備する自信と覚悟とをもたなければならぬ。そしてこの体力を鍛成するものこそ体育なのである。⁽³³⁾

厚生省における「鍛成」もまた、この時点では「体力を鍛成」するものであった。

しかし「鍛成」の概念は大きく変わろうとしていた。この時期の産業体育の概要をよく示すものとして、警視庁工場課労務監督官補であった中野元による『産業体育と厚生産業音楽』（日本蓄音器商会、一九四一年）という書がある。中野は工場などで行なう体操について、「揃える」「立派にやる」「良く見せやう」「会社の名の為めに」とかいふ事を超越して、やむにやまれぬ愛國の熱情を以て、胸に沸きる若き血汐を高鳴らせ、潑刺たる肉体に若人の誇りを見せ」ることが大切であるとか、「産業体操を盛にするには勿論設備も入る金も入用だ。⁽³⁴⁾ が何より第一に必要な事は心だ、気合だ」と述べる。⁽³⁵⁾

また体操について、次のようにも主張する。

体位の向上、氣風の明朗、規律と訓練、之等を通じて狭い場所で、短い時間に、老幼男女全員一齊にやれる運動は体操を描いてないと確信して居る。而して折にふれて話す事だが今日体操は既に慰安娛樂でなく、余暇の善用でも個人の健康でもない。我々の指導原理は一に、人間の筋肉の運動を通して精神思想を支配するにある。即ち

労務者の品性の陶冶向上は先づ形から整へるべきである。⁽⁵⁾

意を認識せしむ

産業体育における体操の目的は、肉体を通じて「精神思想を支配」することであり、「全員一斉」に行なうことと「品性の陶冶向上」が得られるという。「第一に必要な事は心だ、気合だ」という言葉が示すように、中野は精神性を強調するのであつた。

昭和一七（一九四二）年、大日本産業報国会は中央鍊成所を設立した。第一回の「鍊成」は四月一日から六月三〇日にかけて大日本産業報国会労働科学研究所で行なわれ、帝国大学卒業者二名、私立大学卒業者一二名、官立専門学校卒業者三名、師範学校卒業者一名の計一八名が参加した。早朝五時半の起床から夜九時の就寝まで刑務所並みの規律の中で「鍊成」を行なうのであるが、その内容は「主として参拝及禊、講義、教練及体鍊、実習、見学、研究会、懇談会、勤労作業、文化及慰楽指導等に区分する事が出来る」とされ、より詳しくは次のように紹介されている。

一、宮城遙拝、神社参拝により国体観念を養ふ
一、禊、見学、訓話等により根本態度を確立す

一、参拝、見学中は団体行動の訓練に併せて全員の親和を図る

一、禊は専門の道場に於て権威ある指導の下に行ふ
一、学科、術科は主として鍊成所職員担当し生活態度を指導す
一、研究は思想指導を主眼とす（以上、第一期）

一、工場、鉱山、其他の事業場の沿革及現状と産業報國運動の真

一、実習により職場生活の雰囲気を体験し其他見学によりて事業の実情を学ばしむ（以上、第一期）
一、産業運動指導者として必要な関係科目を学ばしめ併せて一般教養を深めしむ

一、術科は研究により指導能力を体得せしむ

一、実習は現場に於ける指導と産業事務の実際を学ばしむ（以上、第三期）
一、前三期に於て体得せるものを反省整理せしむ

一、修了後就任に当りての心構を確立す（以上、第四期、原文送りがなはカタカナ）
この「鍊成」は、明らかに体力章検定合格を目指す「鍊成」とは内容が大きく異なり、宗教性、精神性が強化されている。この中央鍊成所の「鍊成」はどこまで「産業報國」に貢献するのか、実際上の効果もよく分からぬ。

このようになにか変化した「レンセイ」は、松下電器も受け入れたようである。昭和一九（一九四四）年六～七月、小磯内閣による第一〇回行政查察（行政查察使・大河内正敏）は松下無線について、次のような報告書を書いている。

(イ) 現状

(一) 一路生産に邁進せんとする意気、工場内に溢る

(二) 勤労管理に重点を置き人事訓練に依り作業能率の増進を図りあり

(三) 作業管理は量産化に重点を置き素人工員を有効適切に使用して生産能率の向上を図りあり

(四) 見習社員は松風道場に起居せしめて前線将兵を偲び困苦欠乏に堪へしむるの練成を施す

(五) 勤労状態極めて良好なり

(六) 二直制は現在三%に過ぎず

(口) 処置 特になし (原文送りがなはカタカナ)⁽⁵⁾

この時期において松下電器は既に松下造船や松下飛行機を設立しており、軍事協力を行なつてゐた。これと並行するかのよう、「松風道場」において行なわれた系偏の「練成」は、「前線将兵を偲び困苦欠乏に堪へしむるの練成」であり、大日本産業報国会中央練成所で行なわれた「練成」と近い内容だつたと想像される。松下電器においてもまた「レンセイ」は体育から精神主義へ変化していくのである。

2 ラジオとの連関——思想的解釈

「練成」概念が広められた要因として、先に記した通り、当時におけるラジオ受信機の普及を考えなければならない。太平洋戦争開戦を

伝えたラジオ受信機は、昭和一六（一九四一）年には世帯普及率四五・八%であり、既に国民に広く普及していた存在だつた。

メディアの影響力は、大きく分けて二つあると言える。一つは、メディアが発信する内容に関する影響である。「練成」という単語の分布自体はラジオで宣伝されたことが大きいであろうし、真珠湾攻撃のニュースの内容に人々が動搖し、それに続く連戦連勝の知らせに歓喜したのもこの種の影響であつた。

メディアが持つもう一つの影響力は、その内容に関係なく持つてゐる力であり、ラジオと太平洋戦争の関係や「練成」概念の変化に関する限り、こちらのほうがより重要であると思われる。

たとえばグーテンベルク式活字印刷がヨーロッパの文明に大きな影響を与えたことは、これまでも指摘されている。エリザベス・アイゼンスタイン『印刷革命』やマーシャル・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』が指摘するように、活字印刷はその内容に関係なく、同じ文章を大量に流布させたことによって、社会にさまざまな変化をもたらした。⁽⁶⁾マクルーハンがあげる例で言えば、活字印刷は言葉の画一化を生み、標準語と方言の違いを明確化させ、「正しい文法」という概念を生み出した。⁽⁷⁾

これは「標準語を制定せよ」というような本がベストセラーになつて巻き起こした現象ではない。そのような本があつたとすれば、それはメディアの内容に関する影響力である。しかし実際は小説であれ、政治的主張の本であれ、活字印刷の影響によつて人々は地域ごとに異なる言語に対しても一つの標準化を求めたのである。これは誰かオピニ

オンリーダーがいたわけではない。あえてそうした先導役を探すとすれば、活字印刷技術そのものが社会の先導者だったのである。

同様に日本では大正一四（一九二五）年に始まつたラジオ放送と、昭和初期におけるラジオ受信機の急速な普及は、音声言語を大量に複製し、社会に大きな変化をもたらしたはずである。

しかしながら、昭和初期の変革や混乱の大きな要因としてラジオ放送の存在を指摘する研究は、驚くほど少ない。ある程度でもラジオの普及と社会の変化を指摘したものとして、有山輝雄『戦時体制と国民化』『戦時下の宣伝と文化』（現代史料出版、二〇〇一年）、津金澤聰廣『現代日本メディア史の研究』（ミネルヴァ書房、一九九八年）、高津勝『日本近代スポーツ史の底流』（創文企画、一九九四年）をあげることができると、概して研究は少ないと言つてよい。

むしろ、昭和初期の混乱や変化は何が原因かという本質的な問いをたてながら、なぜかラジオ放送についてまったく考えが及ばなかつた研究のほうが枚挙にいとまがない。いくつかの例をあげれば、子安宣邦『昭和とは何であつたか——反哲學的読書論』（藤原書店、二〇〇八年）、司馬遼太郎『昭和』という國家』（NHKブックス、一九九九年）、保阪正康・半藤一利『昭和』を点検する』（講談社現代新書、二〇〇八年）などは、「昭和」を単なる時代区分ではなく、それまでとはまったく異なる特殊な時代としてとらえながら、史上初の電気的マスメディアの時代が始まつたことにまったく触れていない。読売新聞戦争責任検証委員会編著『検証戦争責任Ⅰ～Ⅱ』（中央公論新社、二〇〇六年）は、太平洋戦争に関する広汎な言説をまとめたものであり、戦前

の新聞社の戦争責任にも言及している点で公平な書であるが、ラジオ放送に関しては完全に見落としている。では、昭和初期のラジオはまったく逆であり、この時代、あらゆる社会現象がラジオに引きずられたと言えるほど、ラジオの影響力は絶大であった。筆者は、『ラジオの戦争責任』（P.H.P研究所、二〇〇八年）で不十分ながらこの問題を考察した。⁽⁶⁾ ラジオがこの時代、強大な影響力を持つていながら、これまでの研究で看過されてきた事実は、どれほど強調しても強調しうることはない。

ラジオがもたらした社会的帰結はさまざまあるが、本稿の課題では、マクルーハンが強調する「身体の拡張」がもつとも重要であろう。マクルーハンは次のように主張する。

機械の時代に、われわれはその身体を空間に拡張していた。現在、一世紀以上にわたる電気技術を経たあと、われわれはその中枢神経組織自体を地球規模で拡張してしまつていて、わが地球にかんするかぎり、空間も時間もなくなつてしまつた。⁽⁷⁾

史上初の電気的マスメディアであつたラジオは、地球の裏側の情報を即座に各家庭にもたらし、人々は自宅にいながらにして世界とつながるようになつた。マクルーハンはこれを「身体の拡張」と表現するのである。

しかし厳密に考えれば、ラジオの音声は肉体を伴わずに音声を発し、

もっぱら聞く者の精神に作用する。人々は自らの身体が拡張したように感じるかもしれないが、実際には「肉体なき精神」がラジオで複製されるるととらえるべきではないか。

人間の精神と肉体は、現実的には分離することができないにもかかわらず、ラジオは身体を「今ここ」にとどめたまま、精神が地球規模に拡張されたかのような錯覚を引き起こすのである。この「肉体と精神の関係を錯覚させる」というこそ、ラジオが本質的に持つ影響力であり、ラジオの時代である昭和初期を支配した強力な趨勢であった。

太平洋戦争開始以降の極端な精神主義や、「鍊成」概念のあいまいさや横滑りは、ラジオが持つ本質的な影響力によるものではなかつたか。緒戦で東南アジアでの勝利の情報を見た日本人は、やがて現地へ赴くことや自らの身体が損なわれることを想定しないまま、昭和一七（一九四二）年四月三〇日の翼賛選挙で太平洋戦争を支持した。^⑯下村が批判した「人間を消耗品にする」ような肉弾戦の発想もまた、ラジオが「肉体なき精神」を大量に複製した帰結である。

これらの観点から考えると、松下電器が昭和一六（一九四一）年に開催した「鍊成」運動会は空虚な精神主義とはもつて異なるものであり、「今ここ」に存在する身体を尊重し鍛錬するものであつた。ラジオによる身体の希薄化や、軍国主義的な精神主義とは明らかに反対の方向性が内蔵されていたのである。しかし最後にはこの流れに抗することができず、太平洋戦争が始まると松下電器もまた精神主義的な「レンセイ」を受け入れるに至つたのであつた。それは松下電器が造船や飛行機の製造などの軍事協力を行なうようになつたことと、大ま

かに見て並行していたはずである。

IV 結論

昭和一六（一九四一）年に松下電器が開催した「鍊成」運動会は、一見すると日中戦争から太平洋戦争へ至る道程において、精神主義が強化された結果のように見える。従来いくつかの体育史研究も、この時代を理不尽な軍国主義が強化される時代として描いていた。しかし、松下幸之助と公私共に交流のあつた大日本体育協会会長の下村宏は、こうした一連の流れに反対し続けた人物であつた。松下電器の「鍊成」運動会も大日本体育協会の方針とほぼ並行するものであり、軍国主義が強化されてゆく流れに逆行する面が含まれていたと言つてよい。太平洋戦争が開始され、大日本体育協会が大日本体育会に改組されると、やがて「鍊成」の概念も精神主義が強化され、松下電器も精神主義を受け入れるようになつた。このような時代の流れをもたらしたのが、当時最新のメディアであつたラジオ放送であつた。それはラジオが精神主義的な内容の放送を多く行なつたことが原因ではなく、ラジオ放送が「肉体なき精神」を大量に複製するがゆえに持つていた本質的な影響力であつた。

ここで必然的に次のような問題も想起される。太平洋戦争へ至る社会的な趨勢において、松下電器が寸前で踏みとどまろうとしたのは事実であるが、この趨勢 자체はラジオ受信機の普及によつて引き起こされた面が大きい。日本においてラジオ受信機をもつとも多く売つた企

業は、他ならぬ松下電器であった。幸之助の言説の中で造船や飛行機の製造などの軍事協力について触れているところはあるが、ラジオ受

信機の普及によつて戦争に間接的に関与したという論述はないようである。もし論じているとすれば、抽象的なレベルで本質的な問題として議論していたかもしれない。松下電器と太平洋戦争の関係において、この問題は今後の重要な課題である。

【注】

(1) 松下幸之助『私の行き方考え方——わが半生の記録』(P.H.P.研究所、一九八六年)三〇八頁。

(2) この事実については多くの証言があるが、たとえば哲学者の上田閑照は「当時の軍隊では殴ることは日常であり、しかもその殴り方たるや、地下足袋や厚い皮の剣帯で何の容赦もせずに何度も殴られる。一人の兵隊の小さな落ち度を種に、彼の属する分隊全員が殴られることもしばしばであった」と回顧している。上田閑照『道程——思索の風景』(岩波書店、二〇〇八年)二九四頁。

(3) 以下、この節に限つて「七号三面」のよう『松下電器社内新聞』の号数と頁を本文に記す。また、『松下電器社内新聞』とは別に、歩一會には『歩一會会誌』という機関誌もあつた。本稿では時間の都合上、『歩一會会誌』は参考に出来なかつた。

(4) 「戦時中の記録は焼いてしまつたり散逸してしまつて、あまり残つていない」(石山四郎・小柳道男編『求』松下幸之助経営回想録)〔ダイヤモンドタイム社、一九七四年〕一三五頁)。

(5) 川島虎雄『日本体育史研究』(黎明書房、一九八一年)一三一頁。入江克己『日本ファシズム下の体育思想』(不昧堂出版、一九八六年)三五七頁。

(7) 今村嘉雄『日本体育史』(金子書房、一九五一年)三四三頁。

同前、三四四頁。

三五一~三頁。

同前、三五三頁。

三五八頁。

同前、三五九頁。

同前、三六一頁。

同前、三六三頁。

同前、三六七頁。

三六七~八頁。

水野忠文他『体育史概説』(体育の科学社、一九六六年)三〇〇頁。

同前、三〇三頁。

(18) 『大日本体育協会史』補遺上(大日本体育会発行・編、一九四六年)一一三~一一五頁。

(19) 映画

『民族の祭典』を当時の日本人がどれほど感動的に受け止めたのか、坂上康博『権力装置としてのスポーツ』(講談社選書メチエ、一九九八年)がエピローグで興味深い分析を行なつてゐる。

『東京朝日新聞』昭和十四(一九三九)年三月二九日朝刊一面。松下幸之助と下村宏の関係について、坂本慎一「玉音放送に至るまでの下村宏の事績と思想——松下幸之助との交流と共に」『論叢松下幸之助』第七号(P.H.P.総合研究所、二〇〇七年)参照。

『大日本体育協会史』上巻(大日本体育会発行・編、一九三六年)三三~三、五〇、一〇二、一五二頁。

前掲『大日本体育協会史』補遺上、三〇頁。

『体育日本』第二二卷第四号(大日本体育会発行、一九四四年)、

下村宏「郷隆君の思ひ出」一四頁。

(27) (26) (24) (23) (22) (21) (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8)

同前、一一九頁。

(28) 同前、一一八頁。
(29) 同前、三〇頁。

(28) 「僕の年末あいさつ状は約一萬通に及ぶ」(前掲「持久戦時代」三五二頁)。
(29) 『アスレチックス』一〇巻一二号(大日本体育協会発行、一九三一年)四六頁。

(30) 松下幸之助「道は明日に」(毎日新聞社、一九七四年)一〇八頁。
昭和一五(一九四〇)年に開かれるはずだった東京オリンピックが中止に至った過程は、坂本慎一「松下幸之助を日本中に紹介したジャーナリスト下村宏 第一二回 幻の東京オリンピック」

『PHPビジネスレビュー』二〇〇九年一・二月号(PHP総合研究所)で下村を中心考察した。

(31) 松下幸之助が木友会に入ったことについては、松永定一「新北浜盛衰記」(東洋経済新報社、一九七七年)二五〇頁。

(32) (33) 『体育日本』第一六巻第一二号(大日本体育協会発行、一九三八年)一八頁。原文は「木々会」となっているが、前後の内容から「木友会」の誤植であると判断した。

(34) 前掲「道は明日に」一二三三頁。

(35) 湯浅倉平と下村との関係は、下村宏「私の人生観」(池田書店、一九五三年)五二一~六〇頁、同「持久戦時代」(第一書房、一九四〇年)三三九~四六頁。和歌山県人会やその總裁であった徳川頼倫については前掲「私の人生観」五二一~六〇頁、下村宏「はきちがへ」(四條書房、一九三三年)七一~四頁、同「盜忠」(日本評論社、一九三〇年)一一一~三頁など。前田利為との関係は上野貫一編「千島視察録」(北海道協会、一九四二年)一~九頁など。荒木貞夫と野村吉三郎との関係は、坂本慎一「下村宏と松下幸之助の知人に関するそれぞれの回想——幸之助研究における下村の重要性」『論叢 松下幸之助』第一〇号(PHP総合研究所、二〇〇八年)で既に考察した。荒木に関しては「体育日本」第一七巻第一〇号(大日本体育協会発行、一九三九年)九〇頁において、それまで大日本体育協会顧問から名譽会員になつた旨が掲載されている。

- (50) 下村宏『人口一億』(第一書房、一九三六年)二九頁。
- (51) 下村宏『世界と日本』(朝日新聞社、一九三一年)三五〇頁。
- (52) 下村宏『物の糧・心の糧』(第一書房、一九三八年)一六五頁。
- (53) 『体育日本』第二〇巻第五号(大日本体育会発行、一九四一年)一七頁。
- (54) 同前同号、七頁。
- (55) 中野完『産業体育と厚生産業音楽』(日本蓄音器商会、一九四一年)八一頁。
- (56) 同前、九五頁。
- (57) 同前、二四六頁。
- (58) 神田文人編『資料 日本現代史7 産業報国運動』(大月書店、一九八一年)三三九、四〇頁。
- (59) 石川準吉『國家総動員史』資料編第八(國家総動員史刊行会、一九七九年)九四〇頁。
- (60) 開戦のニュースと国民の高揚、精神性の変化について もりいみよくまとめた書として、櫻本富雄『戦争はラジオにのへ』(マルジュ社、一九八五年)がある。
- (61) Elizabeth L. Eisenstein, *The Printing Revolution in Early Modern Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1983 (別題貢徳監訳『印刷革命』[みずや書房、一九八七年])、Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy, The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press, 1962 (森常治訳『グラフ・ハ・ブルクの銀河系』[みずや書房、一九八六年])。
- (62) 前掲『グラフ・ハ・ブルクの銀河系』邦訳三四九、五四〇頁。日本でも中国宋代の活字印刷が何かしらの影響を社会に与えたはずである
- (50) 下村は昭和一七(一九四一年)年四月一二一日、ラジオに出演し、同月三〇日の衆議院普通選舉に際して買収などの選舉違反や棄權をしなかったこと、自分の利益ではなく国政を考えて投票するよう訴えた。聴取者の反応は、吉見義明・横関至編『資料 日本現代史5 翼賛選挙②』(大月書店、一九八一年)八、四〇頁。
- (51) が、この指摘は寡聞にして聞かない。たとえば鎌倉新仏教と活字印刷の出現は無関係なのであるか。金属活字印刷は、安土桃山時代の天草コレジョなどを除けば、明治以降に本格化したと考えられるが、これも明治維新という大きな変革の中に組み込まれてるので、活字印刷の影響だけを峻別して考察することは難しい。この種の研究が今までなされなかつた要因の一つは、NHKに戰前の録音がほとんど残っていないことから、メディア史研究者の間で戦前のラジオ放送の内容は復元不可能であると信じられてきたことである。しかし筆者は、戦前の放送は筆記で記録を残しており、しかもそれはNHK側ではなく、主に出演者側に残っていることを突き止めた。坂本慎一『ラジオの戦争責任』(PHP研究所、二〇〇八年)に關してこれまで数々の書評があり、概して好評であるが、「研究不可能」とされていた分野を研究可能にしたことについて評価している書評は見当らない。この書の何が定期的であるか、より正確に評価されることを期待する。
- (52) Marshall McLuhan, *Understanding Media :The Extensions of Man*, McGraw-Hill Book Company, 1964, 栗原裕・河本伸聖訳『メディア論——人間の拡張の諸相』(みずや書房、一九八七年)、邦訳三頁。
- (53) が、この指摘は寡聞にして聞かない。たとえば鎌倉新仏教と活字印刷の出現は無関係なのであるか。金属活字印刷は、安土桃山時代の天草コレジョなどを除けば、明治以降に本格化したと考えられるが、これも明治維新という大きな変革の中に組み込まれてるので、活字印刷の影響だけを峻別して考察することは難しい。

(54) が、この指摘は寡聞にして聞かない。たとえば鎌倉新仏教と活字印刷の出現は無関係なのであるか。金属活字印刷は、安土桃山時代の天草コレジョなどを除けば、明治以降に本格化したと考えられるが、これも明治維新という大きな変革の中に組み込まれてるので、活字印刷の影響だけを峻別して考察することは難しい。

(55) この種の研究が今までなされなかつた要因の一つは、NHKに戰前の録音がほとんど残っていないことから、メディア史研究者の間で戦前のラジオ放送の内容は復元不可能であると信じられてきたことである。しかし筆者は、戦前の放送は筆記で記録を残しており、しかもそれはNHK側ではなく、主に出演者側に残っていることを突き止めた。坂本慎一『ラジオの戦争責任』(PHP研究所、二〇〇八年)に關してこれまで数々の書評があり、概して好評であるが、「研究不可能」とされていた分野を研究可能にしたことについて評価している書評は見当らない。この書の何が定期的であるか、より正確に評価されることを期待する。

(56) Marshall McLuhan, *Understanding Media :The Extensions of Man*, McGraw-Hill Book Company, 1964, 栗原裕・河本伸聖訳『メディア論——人間の拡張の諸相』(みずや書房、一九八七年)、邦訳三頁。

(57) 下村は昭和一七(一九四一年)年四月一二一日、ラジオに出演し、同月三〇日の衆議院普通選舉に際して買収などの選舉違反や棄權をしなかったこと、自分の利益ではなく国政を考えて投票するよう訴えた。聴取者の反応は、吉見義明・横関至編『資料 日本現代史5 翼賛選挙②』(大月書店、一九八一年)八、四〇頁。

(58) が、この指摘は寡聞にして聞かない。たとえば鎌倉新仏教と活字印刷の出現は無関係なのであるか。金属活字印刷は、安土桃山時代の天草コレジョなどを除けば、明治以降に本格化したと考えられるが、これも明治維新という大きな変革の中に組み込まれてるので、活字印刷の影響だけを峻別して考察することは難しい。

(59) が、この指摘は寡聞にして聞かない。たとえば鎌倉新仏教と活字印刷の出現は無関係なのであるか。金属活字印刷は、安土桃山時代の天草コレジョなどを除けば、明治以降に本格化したと考えられるが、これも明治維新という大きな変革の中に組み込まれてので